

成果の概要

齋木 潤

平成 21 年 6 月 1 日より平成 21 年 7 月 7 日（京都大学での滞在は 6 月 30 日まで）にかけてダッカ大学心理学部の Shamsul H. Mahmud 教授を招聘し、主観的幸福感に関する文化比較研究を行なった。招聘研究者は今までにバングラデシュ、ドイツ、アメリカ合衆国で主観的な幸福感に関する心理学的な調査を行い、その文化間比較に携わってきた。当初の計画では、滞在期間中に日本においても同様の調査を行なう予定であったが、1 ヶ月という短期滞在では、調査を実施するまでには至らなかった。これは、あらかじめバングラデシュで日本語版を作成することが困難であったことなどにより、準備が間に合わなかったためである。このため、滞在期間中は主として、将来的な文化間比較研究に関するディスカッション、今までの研究成果に関する講演などを行なった。また、報告者の研究室に所属する大学院生の研究に関して一人一人と面談をもち、いろいろとアドバイスをしてもらった。また、Mahmud 教授は視知覚の実験心理学研究もしているため、知覚研究についても報告者、大学院生とディスカッションを持つ機会を持った。

具体的には、6 月 1 日の来日後、6 月 4 日に研究室を訪問していた別の外国人研究者の講演に参加しディスカッションに加わってもらった。その後、6 月 8 日からの週に、研究室の大学院生 11 名と一人 1 時間程度かけて面談をしてもらった。この面談では、大学院生が英語で自分の研究を Mahmud 教授に紹介し、それに対して Mahmud 教授から色々とコメントやアドバイスをもらった。修士課程の院生は、研究分野に関連した英語の教科書を含む基本的な文献を紹介してもらい、博士課程など年長の院生は研究内容に関して統制すべき条件などについてのさまざまな示唆を受け、それぞれに多くのメリットがあったと語っている。

6 月 22 日には、心の未来研究センター長の吉川先生、及びセンターで文化比較研究を進めている内田助教と面談し、将来的な文化比較研究の展開の可能性について色々と意見交換を行なった。6 月 23 日には、グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」の主催で、Mahmud 教授の行なってきた価値観に関する国際比較研究、幸福に関する国際比較研究に関する講演会を行なった。この講演の中ではバングラデシュ、ドイツ、アメリカ、日本の 4 カ国の大学生と教員に対して価値観についての質問紙調査を行なった結果が示され、バングラデシュのような発展途上国の学生と先進国の学生の持つ価値観の違いと共通性に関する興味深いデータが示された。また、先進国の間でもドイツ、アメリカ、日本の間でさまざまな差異のあることが報告された。幸福感に関する研究では、生活満足度尺度 (SWLS) を用いて、ドイツにおける生来のドイツ人と移民との幸福感の比較が行なわれた。移民のグループの幸福感が世代によって大きく変化していることがデータによって明らかにされた。この講演会に先立って、グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」で実施されている幸福感の国際比較

のプロジェクトのメンバーとのディスカッションを行い、調査における協力、共同研究の可能性などについて検討を行った。

また、6月24日には、Mahmud 教授のもう一つの研究テーマである視知覚についての講演会を行なった。講演では、MacCollough 効果として知られる空間周波数随伴色残効という現象の正規メカニズムに関する実験研究の話をしていただいた。MacCollough 効果と通常の色残効の特徴の共通性と差異に注目し、順応刺激の特性を変えることによる残効の起こり方の変化を体系的に検討することにより、空間周波数随伴色残効のメカニズムに迫る研究で、知覚の実験心理学に関する非常に興味深い講演であった。また、この講演会では、バングラデシュの文化や暮らしに関する紹介もしていただいた。

全体として、一ヶ月という短い滞在期間であったため、文化比較研究、知覚の実験心理学研究ともに具体的な実験や調査を行なうことはできなかったことは残念であるが、特に文化比較については、滞在中に多くの研究者とディスカッションの機会を持ち、今後バングラデシュのような発展途上国と日本とのさまざまな文化比較研究を進めていく基盤を築くことができた。また、今回の訪問でのディスカッションを通して、バングラデシュを含む南アジア文化の独自性に改めて気づかされた。例えば、インドやバングラデシュの人々の優れた数学的能力は何に起因するのかといった問題は、文化と認知の研究にとって興味深い問題であると思われる。自身の研究を含めて、文化と認知に関する研究は西欧と東アジアの比較が中心になって進められているが、より多角的な比較検討が不可欠であることを強く感じた。